

マスコミに氾濫する〈カタカナ言葉〉

小林 宏 行

岡山理科大学教養部

(1990年9月30日 受理)

〈カタカナ言葉の“乱用”に厳しい指摘〉

「マスコミはカタカナ言葉を使い過ぎる」「美しい日本語を損う外来語を乱用するな」——こんな怒りや不満の声が、新聞の投書欄にしばしば掲載される。次から次へと洪水のごとく氾濫するマスコミのカタカナ言葉に対する批判は非常に根強いものがある。

そればかりではない。「なぜ国産たばこに、わざわざ外国語ばかり使うのか」「文部省のカタカナ語使用に異議あり」など、行政に対する風当たりも厳しいものがある。(資料①)

投書(別掲)の指摘にもあるあるように、〈集会, 討論会〉をミーティング, コンGRESS, シンポジウム, ティーチイン, パネルディスカッション, ヒアリング, フォーラムなど様々な言い方をすることに首をひねる読者も多い。雑誌を開くと、これでもかとばかり、目新しいカタカナ言葉, 横文字が次から次へと登場してくる。

ペレストロイカ, デタント, シーリング, アクセス, レトロ, グルメ, エスニック, パフォーマンス, コンセプト, エグゼクティブ, シンドローム, カウチポテト, NIES, DINKS…

紙面のかかなりの部分を、これらのカタカナ言葉や横文字が占めている。これらの言葉の中には、日本人だけにしか通用しない、わけのよくわからないものも多い。意味不明のものさえまじっている。

1986年9月、岡山県議会で興味あるやりとりがあった。一般質問に立った1人の議員が「県の策定した第3次県総合福祉計画には、サイクルアンドライド方式, キャブシステム, OAI運動など横文字が多過ぎる。このうち23の用語について県職員100人に聞いたところ理解率は44.4%しかなかった」と発言した。

新聞報道(9月26日付, サンケイ朝刊)によると、まず〈おかやまトライアングルR&D〉がわかっていたのはわずかに7人。〈サイクルアンドライド方式〉は10人。〈マリンコミュニティポリス構想〉〈ローカルデポジット制〉はともに12人。中にはサイクルアンドライド方式を「サイクリング車の乗り捨て」とか、マリンコミュニティポリス構想を「海上都市警察構想」というユニークな回答もあったという。(資料②)

これは単に岡山県だけの問題ではない。政府広報にも外国語はあふれ返っている。

「テクノポリス構想」「環境アセスメント」「デポジット制度」「21世紀フォーラム」「オ

文部省のカタカナ語使用に異議

主婦 小畑 明子 27
(兵庫県宝塚市)

七日付の新聞に、文部省が小中学校に対して空き教室を改修し、特別教室などに転用することを勧めた学校用手引書「学校施設のリニューアル(再活用)」をまとめたところだ。

その中で自体は良い試みだと思いが、その手引書の題名はいただけない。わざわざ「リニューアル」という怪しげな外来語を使う必要性があるのだろうか。

カタカナ語のはらんが問題になって久しいが、最近の傾向として「リボン」「リハウス」「リメイク」など「再○○」という表現を避けて使用される、あるいは消される言葉が多いように思う。

一般企業がイメージアップのために使うのならいざ知らず、文部省が学校へ向けて作成した手引書に、そのようなカタカナ語を使うのは、何となく軽薄な印象を受けて、少なくとも私は賛成できない。

カタカナ英語が多すぎます

高校生 斎藤 和恵 17
(愛知県刈谷市)

高校に入学して間もなく、現代社会の授業でカタカナ英語を習った。ブルジョワジ、プロレタリアート……、高三になって今度は政治・経済の授業で、ポ・シーミック、ビルト・イン・スタビライザー……。いい加減にしてくれ、と叫びたくなる。教科書だけでなく、身の回りにはカタカナ英語が多すぎる。

もちろん学校ではテストを受けるが、現代国語は、まるで英語のテストである。カタカナに書き換えられた哲学用語がさらに私の頭を悩ます。現代小説を眺もうものなら、国語辞典ならぬ英和辞典が必要になる。意味のわからないカタカナから「R」「L」音や「B」「V」音の区別も考慮に入れて、英語を考え出さなくてはならない。なんと本は読みにくくなったことか。

外国語のはらんには、私ももうすでにおぼれている。そろそろ「カタカナ教えます」などというチラシがポストに入ってくるかもしれない。

国産たばこには日本語名つけて

林業・家原 俊夫 59
(島根県)

私は、胃の病気を患っている。自宅療養しております。先日、病院で「治療中はたばこをやめるように」と、医師に言われました。たばこをやめることは難しく、ニコチンの少ない品を求め、少量ずつたばこを楽しんでいます。

私はそれまでたばこは「わかば」を吸っていました。近所のたばこ店で「軽いのを」といって新しいたばこを買いました。ところが表示が英語で、店員から聞いていた名前を忘れてしまいました。つきに買うときに苦労しました。

たばこの名前になぜ外国語を使うのですか。だれにも親しみやすい「ワグイス、ツバメヒバリウメ、サクラ、キク」といった名前にしたらと思います。浜華さんが国会で「日本の国会だから日本語で話すように」と言ったのに同感です。

日本で生産されるたばこだけでも日本語で呼ばたい。昭和一ケタ生まれの願いです。

日本語損なう 外国語の乱用

東京都 土田 玲子
(翻訳業 45歳)

ミーティングに始まり、コンフェランス、コンGRESS、シンポジウム、あけくの果てはオープンエブニング、フォーラム等々、これらはすべて集金とが会合のこと。いやはや、日本人の外国語好きもここに至っては病気に近い。

れっきとした日本語が存在するにもかかわらずテレビや新聞では、外国語を使用する風潮が強い。水色、空色、青、碧(みどり)、紺(あじ)、と微妙に色調の異なる美しい言葉や、発足、発進、開店など場合にに応じて意味の異なるきめの細かい表現を、「ブルー」とか「スタート」「オープン」だとか。

時にはコンセンサスのレトリックだのと、一般の日本人には意味の解せぬ言葉さえ使う輩(やから)も多い。「テーマ」と言えはほとんどの日本人に通じるのに、わざわざ「テーマニング」などと気取るから、なんの事だか分からなくなる。それなら「テレビジョン」と言いよめなものだが、だれにでも通じるのでは(けん)学的効果がないからか、テレビと省略する。

首相が得意がって英語を使いたがるように、外国語崇拜は維新以来、日本人をむしばむ悪疫なのかもしれない。だが、明治の人間は外国語を日本語に置き換える努力をしたのに、昨今の日本人は思考力の低下のせい、その努力が足りない。

「ブズマン制度」など次から次と飛び出してくる。これは外国語のキャッチフレーズで新しい構想をぶち上げると、国民に何か新鮮な事業計画のようにアピールし、同時に予算の獲得

にも大きな効果があるということのようである。

かつて、中曽根首相が日本記者クラブで記者会見をしたさい「アーバン・ルネサンス」「キャッチ・アップ」「ディスアドバンテージ」など横文字を連発し記者団を閉口させたことがある。

カタカナ言葉の氾濫は、こればかりではない。外国語が苦手な高齢者の周辺にもどっと押し寄せている。厚生省社会局老人福祉課が1983年に監修した『お年寄りのお世話』には「パウダーを使うのは、お年寄りの性にあいません(略)。バブラーを使えば、からだが生んから温まります(略)。床面を温めるためにサーキュレーターを…」など、老人には理解

(資料①)

しがたいカタカナ用語が多過ぎる——と話題になった。(1983年10月23日付毎日新聞朝刊)

ある老人ホームの機関紙には「ケアセンターは医師，ケースワーカー，カウンセラーらの協力を受け，医療サービスと老人福祉センターの両機能を目的としたもので（略），家事援助サービスの入浴サービス，理容サービス，食事サービス，レクリエーション活動と緊急時のショートスティサービスが利用でき…」とカタカナ言葉が羅列されている。これでは，いったいどんな恩恵が受けられるのか理解に苦しむ老人も多いのではなかろうか。

〈新聞の見出しにもカタカナ言葉が…〉

高齢者である筆者の母もうるさかった。私は1986年3月末まで32年間，毎日新聞社に在籍，後半の13年ほど紙面製作を担当する整理部にいたが，70歳近い母は，ことあるごとに文句をいった。

「サミット，サミットと毎日のように使っているが，どういう意味ね」「シーリングやゼロ・

オプションなどまったくちんぷんかんぷん，新聞はどうして年寄りにもよくわかるような日本語で書かないのよ——母は，あたかも読者の代表のごとく連日のように不満をのべた。

そのつど，私は強弁した。「サミットというのは，英語の辞書をひいたら山の頂上，てっぺんということだけど，いま新聞が使っているのは〈先進国首脳会議〉，つまり世界のトップの人が集まる会議，それくらいはおぼえてもらわないと…〉

- ★おかやまトライアングルR&D……「吉備高原テクノポリス」「総合流通センター」など3点を結んだ情報拠点づくり
- ★サイクルアンドライド方式……もよりの公共輸送機関まで自転車を利用する方式
- ★マリンコミュニティポリス構想……資源エネルギー庁の海洋開発構想
- ★ローカルデポジット制……容器返却保証金上乗せ制度

(資料②)

東京サミット開幕

「パトリオット」来年度導入

アメニティの日常化を

117 済
ウルトラ・イーグル

ゼロ・オプション不変

シーリング見直し

サミットも今年で16回目、いまでこそ、この言葉はポピュラーになったが、1回目の東京開催（1979）の時は、読者からもかなり抗議の声が強かった。新聞の見出しに使うことで、多少のいいわけをいうなら

東京サミット開幕

東京「先進国首脳会議」開幕

見出しは文字数が少ない方が効果的である。漢字で7字かかるところがカタカナでいくと4字ですむ。しかも見出しの文字すべてが漢字というのは読みづらい。現場では、なるべくむずかしいカタカナ言葉は避けたいと思いつつながら、いいかえるとかえってわかりにくくなってしまふものが多い。ただし「ゼロ・オプション不変」とか「シーリング見直し」などは、なるべく日本語でいたいものである。

〈カタカナ言葉、その生い立ち〉

最近の新聞紙上には、たしかにカタカナ言葉があふれ返っている。読者からの要望も十分にわかりながら、現状は年ごとに増加の一途をたどっている。ただし、カタカナで書かれてあるからといって、それがすべて外来語かというところではない。もとをたどると様々なケースが考えられる。

①イヌ、ネコ、カラス、カツオ、マグロ、バラ、ヒマワリなどの動植物や、「最後のツメが甘い」「結婚しないワケ」「秋ヒンヤリ」「負担ズッシリ」など日本語をカタカナで表記する場合。

②古くから伝来し、すでに日本語化し漢字で表記できる“借用語”。たとえばタバコ（煙草）、カップ（合羽）、カルタ（歌留多）、キセル（煙管）など。

③純然たる外国語をそのまま使用。「グルメの旅」「これぞ究極のエスニック料理」「年1回のクリアランス・セール」。

④もともとは外国語だが、日本に入ってニュアンスが違ふ使い方。デート（日付→異性と会う）、トラバユ（労働→転職）、パーマ（永久の→頭髪パーマ）。

⑤和製外国語……外国語を使っているが、その国の人たちには通じない日本製の言葉。サラリーマン、OL、ナイター、シュークリーム、チャック、ベースアップ。

⑥カタカナ造語……これは“言葉遊び”の一種、流行語として話題をまくこともある。ギャル、アメダス、カッターシャツ。

①のケースは「猫」「鯉」「薔薇」などが、戦後、漢字の使用が制限され、常用漢字に含まれていないためマスコミもカタカナで表記するようになった。「ツメ」や「ワケ」は漢字はあるのに、その言葉を強調したい場用に使われる。最近これが増加してきた。これに対し「わけもなくカタカナで書き過ぎるのはどうか」とマスコミの中には、こういう反省もある。

④の場合は、外国語の誤用、あるいは中途半端な使い方という批判も多い。たとえば、

英語のアパート (apart) は、“離れて”という副詞だが日本では“共同住宅”“集合住宅”の意味で使っている。正しくはアパートメント (apartment) であるが、日本人は長ったらしい表現を敬遠、短縮したことで誤用している。

また、英語の sex は①男女の性別②性欲③男女の性行為などの意味なのに日本ではまず③のケースでいうことが多い。デートと同じように、英語の一部だけが強調され日本語に入ったケースである。こんなことからとんでもない行き違いが発生する。外国に行く時の入国手続きに氏名、職業欄などのほかに〈sex〉という記入欄がある。これは男女の区別を書く欄だが、ある日本人が“no experience” (経験なし) と書いたという。(小島義郎「まちがしやすい英語」)

⑥の場合になると奇想天外な“びっくり造語”が飛び出してくる。〈カッターシャツ〉の語源はあるスポーツ用品メーカーが新商品のイメージアップを狙い“勝った”シャツというひらめきから創案した。(「カタカナ用語と略語3300辞典」日本実業出版社)。〈ギャル〉はジーンズメーカーが女物のジーンズに“ギャル”とネーミングして売り出したのが初めてという。恐らく英語の“girl”をフランス読みしたものであろう。このギャルはマスコミにもしばしば登場し市民権を得てきた。そして面白いことに、使われているうちにガールにくらべるとギャルの方が“明るく陽気な女の子”というイメージが固定してきた。

〈むずかしい「外来語」の定義〉

“外来語”と“外国語”ではニュアンスが違う。外来語には、時代的な年輪を感じる。ただし、その定義は、様々である。外来語の定義は？辞書によると――

〈広辞苑〉外国語で国語に用いるようになった語、伝来語。

〈外来語の語源〉(角川書店) 外国語から日本語の中に入ってきた単語。いわゆる漢語も中国から取り入れられてきたものだから本来、外来語といってよいはずであるが、慣習として含めない。日本で外来語というのは、主としてヨーロッパ諸言語から日本語の中に入ってきた言葉を指しているのが普通である。

さて、マスコミではどのようにとらえているであろうか。毎日新聞の用語集(1989年版)「外来語表記の基準」によれば、次のように書かれている。

一、普通、外来語といわれるものには次の三種類がある。

①古くから伝来し、国語化しているもの。(たばこ、きせる、かっぱ、かるた)

②日常生活に密着し、原語に関係なく表記の固定化したもの。(ラジオ、スタジオ、コーヒー)

③新しく吸収され、まだ外国語の感じの強いもの。(アグレマン、シリアス)

①を除き②③は片仮名で書く。②は慣用が固定化しているからそれに従う。③の場合は出来るだけ原音に近く、しかも日本人に読みやすい表記を用いる。ただし、一般社会の表

記が固定したものはそれに従う。

二、一般化していない外国語はなるべく使わない。新しい概念で、適当に言い換えにくいものや、専門語で分かりにくいものは、文中にカッコして短い説明をつけるか、記事の末尾に注として説明を入れる。

マスコミ各社は同じようなハンドブックを作成している。ここに書かれているように、各社とも安易に外国語を使用することは戒めている。読者になるべくわかり易い紙面を作りたいというのはマスコミの大原則である。

〈漢字も本来は外来語〉

『外来語の語源』にも書かれているように、われわれ日本人がなんの抵抗感もなく使っている漢字も、ルーツをたどれば中国からの外来語である。文字をもたなかった日本人は、4Cごろ中国から伝わってきた中国語を取り入れて使用した。したがって漢字の読み方はいうまでもなく音と訓がある。〈山川草木〉は音で読めば「サン・セン・ソウ・モク」であり、訓では「ヤマ・カワ・クサ・キ」である。漢字の総数は諸橋轍次博士の『大漢和辞典』（1986年改訂版）には50,294字が収められている。

日本人はさらにみずから漢字をつくり出した。“国字”（右表）と呼ばれるが、この造語にはいろいろアイデアがこらされており興味深い。山を上下するから「峠」▽すぐくさる弱い魚だから「鰯」▽身なりを美しくするから「躰」など文字からだいたいの意味が想定できる。日本製の漢字だから訓読みしかなのは当然である。

日本人は、この漢字をもとに、9Cごろカタカナ、ひらがなを創案した。これは漢字の略字化で、日本人の言語発達、ひいては学問、文化の向上に大きな役割を果たした。表音文字であるカナの創案は、文字を大衆化させたのである。

今日、日本人は外国語を次々と短縮し独自の使用法をみ出している。テレビ（テレビジョン）、エアコン（エア・コンディショナー）、マスコミ（マス・コミュニケーション）インフレ（インフレーション）、バイト（アルバイト）など数えあげたらキリがない。これはカナ文字を考えついたのと同じ文字の簡略化であり、日本人の特性といえる発想であろう。

ただし漢字はすでに日本語として定着している。“美しい日本語”と読者が指摘する日本語になっている。したがっていわゆる外来語には含まれないケースが多い。

〈国字〉			
セ ン チ メ ー ト ル	鰯 い わ し	梅 と が	峠 と う げ
	躰 た ら	杣 そ ま	袴 か み し も
	辻 つ じ	鱧 き す	梔 も み じ
	躰 な ぎ	釧 ほ た ん	杖 わ く
	禪 た す き	鋌 び よ う	檉 か し
	佛 お も か げ		嬬 か か あ

〈外来語伝来のルーツ〉

外来語の定義は様々に分かれるが、一般的に考える外来語の伝来は16Cなかば以降に入ってきた主として西欧諸外国の言語をさしている。前記「カタカナ言葉の生い立ち」の項で述べた②のケース、つまり「古くから伝来し国語化したもの」と、さらにもう一つ「幕末から明治にかけ大量に流入してきた」外国語ということができよう。

ルーツをたどると、まずわが国に西洋人がやってきたのは室町時代の末、1543年（天文12年）種子島に漂着したポルトガル人である。この時、鉄砲が伝来する。同時に、ポルトガル語が、いわゆる日本最初の外来語として入ってくる。以来、ポルトガル船は毎年のように来航、1549年の宣教師ザビエルの来朝をきっかけに、

室町末期・戦国時代に伝来した外来語

（松村明「外国語と外来語」から）

〈ポルトガル語から〉

クルス（十字架）、インヘルノ（地獄）、カップ（合羽）、タバコ（煙草）、ジバン（襦袢）、ボタン（釦）、ラシャ（羅紗）、ビロード（天鵞絨）、パン（麵麩）、カステラ、テンプラ（天麩羅）、カルタ（歌留多）、コンペートー（金平糖）、ビードロ。

〈スペイン語から〉

シャボン、メリヤス（莫大小）、メリンス。

〈オランダ語から〉

ブリキ、ゴム、コルク、ズック、ポンプ、ガス、カンテラ、ガラス、コップ、ペンキ、コック、コンパス、コーヒー、ビール、アルコール、レンズ、メス、スポイト、オブラート、エキス、チンキ、サフラン、コレラ。

〈その他〉

- ▶カンボジア語＝キセル（煙管）、カボチャ（南瓜）
- ▶ジャワ語＝サラサ（更紗）、ジャガタラ（馬鈴薯）
- ▶ヒンドスタ＝語＝カナキン（金巾）

多数の宣教師たちがキリスト教の布教にやってきた。

この時期に、キリシタン、デウス、クルスなどラテン語系も含め、宗教、通商関係の用語が入ったが、ほとんどが消えてしまい、今日まで残っているのはそんなに多くない。

このあと、徳川幕府は1639年（寛永16年）に鎖国令を出し国を閉ざしてしまうが、それまでの約百年間にスペイン、ポルトガル人らがあいついで来日、通商・文化の門戸が開かれ、同時に諸外国の言語も大量に流れ込み、さらに彼等の口を通してカンボジア、ジャワなど南方諸言語も流入する。

オランダ人の渡来は1600年（慶長5年）と遅く、平戸に商館が開かれ貿易が始まったのは1609年だったが、鎖国時代に入ってもオランダとだけは通商を続けたため、オランダ語はいまなお日常語として残っているものが多い。とくに8代将軍・徳川吉宗の時代は、洋書を解禁したため蘭学が勃興、オランダ語を通して医学、天文学、物理、化学など西洋の学術が盛んとなり、数多くの自然科学用語が伝わった。第1回目の外来語ブームの時代である。

蕪村の句に「ビイドロの魚おどろきぬ今朝の秋」と外来語が使われていることからみても、すでに当時の生活にかなり食い込んでいたことがうかがえる。いまでも残る〈半ドン〉はオランダ語のゾンダッハ (zondag) が語源、ゾンダッハは日曜日、したがって日曜をドンタク、土曜は“半分休む”ことから半ドンが創作された。

外来語は、このように日本人の生活の中にまで浴け込んでくる。したがって厳密な意味で外来語というのは、単に外国から入ってきた言葉というだけでなく“すでに日本語にな

りきっている外国語”である。つまり、もともとは外国語であるけれども、それがいまではどこの国の言葉であったのかわからないほど日本語になりきっているというのが、純粹な定義といえよう。たとえば、煙草、煙管、合羽、襦袢、更紗、歌留多、天麩羅、馬鈴薯、金平糖などは、すでに完全な日本語として通用している。

NHKテレビにかつて「面白ゼミナール」というクイズ番組があった。そこで「ガーゼ、ブリキ、バネ、コンペイトウのうち外来語でない日本語はどれか」という質問に“バネ”と正答したのは12人のうちたったの1人だけだった。これはもはや日本語と外来語の区別がつかなくなっている言葉ということができる。

外国語の流入時期を、いま述べた16C中頃から戦国時代、江戸時代を第1期とすれば、幕末から明治時代の文明開化期が第2期、さらに最近の大量流入時代を第3期と大きく分けて考えてみたい。

幕末・明治以降に伝来した外来語

(松村明「外国語と外来語から」)

<イギリス、アメリカから>—————

マシン(machine), ワイシャツ(white shirt), セCOND(second), ハンカチ(handkerchief), バケツ(bucket), アイロン(iron), グローブ(glove), ルーキー(rookie), エレベーター(elevator), ジンクス(jinx), パジャマ(pajamas)

<フランス語から>—————

ゲートル(guêtres), シャッポ(chapeau), スボン(jupon), マント(manteau), アグレマン(agrement), コミュニケ(communiqué), コント(conté), デカダン(décadent), デッサン(dessin), レーヨン(rayon),

<ドイツ語から>—————

アレルギー(Allergie), ビールス(Virus), イデオロギー(Ideologie), ガーゼ(Gaze), エネルギー(Energie), アルバイト(Arbeit), ヒュッテ(Hütte), ザイル(Seil), アイスパーン(Eisbahn), アンチテーゼ(Antithese)

<イタリア語から>—————

アルト(alto), ソプラノ(soprano), テンポ(tempo), カンゾーネ(canzone), バレリーナ(ballerina), フィナーレ(finale), スパゲッティ(spaghetti)

<ロシア語から>—————

ツンドラ(tundra), ペーチカ(pechka), イクラ(ikra), ノルマ(norma), サモワール(samovar)

<オランダ語から>—————

サーベル(sabel), ラッパ(roeper), タラップ(trap), デッキ(dok), マスト(mast), マドロス(matroos), ランドセル(ransel), オンス(ons), ガロン(gallon), ポンド(pond), トン(ton)

この第2期と第3期の大きな違いは、外国語の受け入れ方である。現代は外国語をストレートにそのまま取り入れているが、幕末、明治の知識人たちは、日本人に理解しやすいように外国語を漢字に意識するという大きな努力を重ねた点であろう。

300年にわたる鎖国時代が終わって明治に入ると、西洋文明が奔流のように押し寄せてくる。「ざんぎり頭をたたいてみれば、文明開化の音がする」——日本人はマゲを切り落とし洋服を着るようになった。江戸時代には「牛の乳を飲むと角（つの）が生える」と嫌われていた〈ミルク〉を飲むようになった。〈ランプ〉もついた。衣食住すべての面で、世の中が大きく変貌した時代である。

同時に言語も英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語など諸外国からどっど入り込んでくる。ドイツ語からは、ガーゼ、オブラート、ギブス、ワクチンなどの医学用語。フランス語からは、クレヨン、パレット、アトリエ、デッサンなどの美術用語。イタリア語からは、ピアノ、ソプラノ、アルト、オペラなどの音楽用語。もちろん英語からは日常用語など、さながら大洪水が押し寄せるごとくすさまじい勢いで流れ込んできた。

江戸時代から明治にかけ、当時の知識人は、これらの諸言語を日本語に意識して受け入れた。これが現代と大きく違うところである。次々と新しい言葉が造られていった。時代別に主なものを拾い出してみると——

〈江戸期〉天文学、医学、植物学、物理学、化学分野（神経、動脈、静脈、精液、浣腸、脂肪、酸素、水素、窒素、望遠鏡など）

〈明治以降〉法学、哲学、文学、美術分野——明治期における造語の大家は福沢諭吉、坪内逍遙、西周らであった。彼等は西洋の思想、文化を取り入れるにあたって、まず用語の翻訳からはじめた。〈フィロソフィア〉〈ヒロソヒア〉とカナ書きしていたのを〈哲学〉

〈西周〉 哲学、論理学、心理学、客観、主観、想像力、直観、定義、命題、理性、本質、肯定、実体、産業、消費、権利、業務、文学、批評、観察、小説、伝記、戯曲、脚色、比喻

〈坪内逍遙〉 台詞、哀歌、文化、作者、俳優、傑作、主人公、批判、運命、男性、女性、標準

〈福沢諭吉〉 自由、鉄道、演説、討論、可決、否決、為替、版權

という言葉をあてはめたのは西周である。これら先人の努力はいま考えるとすごいエネルギーを感じる。

1987年（明治20年）1月の『時事新報』の社説は「接吻の風習を起すべし」と題し「男女はハゲしい時には身体をすり合わせなければ満足しないものだ。妙齡の女性が春を思うのも、自然の理性より出るもの。大いに接吻すべし」と、当時としては破天荒な主張を掲げ、読者をあっといわせた。それまでの日本人の感覚でいうなら、この行為は情をかわすことであり、人前ではいふべきことではなかった。

〈接吻〉という言葉も、もちろん当時はまだなかった。〈口吸〉〈啜面〉などいていたという。欧化風潮の中から自由な恋愛を謳歌するムードが起こり〈キス〉という外国語が入ってきたのである。

「鼻と鼻がおじゃまになって、キスもできないテングさん…」という歌が流行したのが1974年（明治7年）というから、この頃すでに〈キス〉という外国語が人々の口にのぼっていたとみられる。これに〈接吻〉という訳語を考え出したのは後年の明治の中頃という。ピアノを〈百音琴〉、スケートを〈走氷〉など外国語を次々と日本語に意識した。そればかりではない。外国の国名、地名、人の名前まで漢字でいい表した。（右表）

マスコミは、今でも「日米経済摩擦」

「日伯交流80周年」など米、英、仏、独、伊などの漢字国名を使用するが、これはその名残りである。地名ではハリウッドを〈聖林〉、ケンブリッジを〈劍橋〉などアイデアあふれる造語もみられ、ここらにも日本人の造語センスがうかがえる。

〈外国語がストレートに流入〉

現代の風潮は明治期とは一変、外国語を意識しないでそのままストレートに取り入れている。この原因はいろいろ考えられる。あまりにも大量に流入してくるため、いちいち漢字をあてはめている暇がないし、また明治の文化人のような漢文の素養がある人も少なく

漢字をあてた外国の国名、人名

〈国名〉 亜米利加、英吉利、仏蘭西、独逸、伊太利、露西亞、印度、埃及、希脈、和蘭、瑞西、西班牙、墨西哥、伯刺西爾、葡萄牙、濠太刺利、白耳義、土耳其、瑞典

〈地名〉 紐育、巴里、倫敦、伯林、莫斯科、羅馬、劍橋、牛津、聖林

〈人名〉 基督、沙翁、杜翁、古論武士、伊曾保、干德、獅威挫、葉武烈士、居里、恵知遜、甲比丹屈克、咸区土留飛豪、紐頓、柴可夫斯基、叔曼、克勤巴都拉、惹安達克

特集！ますます
欲しい
欲しい
108
煩悩
ハイパーインテックス

●本気でボルシエが欲しい●ターザン野郎の下肝を抜く自転車車が欲しい●1万円ですぐのハートをぶち抜きたい●6畳間で快適AVライフを目標したい●ロレックスまっ青の流行ブランドを知りたい●週末は彼女とグルメリしたい●インポートプリントが着たい●貸し切りで遊びたい●ファッション小物でライバルと差をつけたい●コレもってりや勝ちよの艶が欲しい●六本木の交差点で隣のBMWを鼻で笑うハイクが欲しい

今月はコレが王様
新世代豪華水曜DAYの夜、気分が上がる！
は新登場のMINI、最新の海外旅行セブン、豪華車用ナビ

オックスフォードブルーを脅かす
FAX: 03-5561-1111

渡辺和博の今日事情大図解
巨大テキストのこの本まで

最新NYの夜遊び指南
若者たちの超流カテゴリー

ハイパー
ハイパー(スーパー)
GOODS&LIFE

月刊=ピギン ● 定価380円

Begin

本日創刊!

世界文化社

(雑誌にはカタカナ文字がいっぱい)

なった。また戦後は当用漢字、常用漢字などの漢字制限もあって意識しづらくなったことなどがあげられる。しかし、それよりも、冒頭で述べたように、外国語をそのまま使った方がスマートで、おしゃれっぽいという若者感覚が反映している。

若者向けの月刊誌、週刊誌のタイトルはほとんどがカタカナか、横文字か、英語のアルファベットばかり、内容も年輩者には理解できないような外国語があふれ返っている。

「スーパー・エアロフォルムロネット64PSの新ハイパーエンジンを搭載してJRダブルエックスは、いま新たな走りのステージへ発進した。」(「Pent House」'88.12月)

「幼い頃かぶったベレーは少女のイメージ。そんなキュートなベレーが、この夏はぐっとフェミニンに変身する。柔らかなオーガンディ、シックな黒——」(「Avenue」'87, 5月)

「スパークリングワインとピーチネクターの組み合わせさ。(略) ベネチアのハリズバーのオーナーがオリジナルで作ったそうだよ。だからイタリアのスパークリングワインのスプマンテを使ってもらうんだ。」(「pumpkin」'58.5.25)

若者向け雑誌には、このようなカタカナ言葉が羅列されている。とくにファッション関係や旅行、クルマ情報にその傾向が強い。いやそればかりでない。経済、貿易関係やコンピュータなど科学、学術用語、不動産部門などあらゆる分野にわたって膨大な外国語が入りこんできている。

民間企業も、何か新しい構想、製品をアピールする場合、必ずといっていいほどカタカナ言葉が並ぶ。1988年11月28日、丸紅、富士銀行を中核とする芙蓉グループと松下電器産業が明らかにした関西国際空港隣接地に建設される国際自由都市「リブル・シェール」(フランス語で自由な空の意)構想の計画内容を新聞は次のように伝えている。(’88.11.29 産経新聞朝刊)

「計画では①24階建てのインテリジェントホテルを中心としたホテル・ゾーン②りんくうタウン内をカバーする情報センターやコンベンション機能をもつインテリジェント・タワー・シティー③国際高度医療センターや国際ビジネス研究センターなどが入居するリサーチ・アンド・ディベロップメント・ゾーン(R&Dゾーン)④物流の中核機能を備えたマーチャンダイズ・トレード・ゾーン——の4ゾーンに区分し、それぞれに高層ビルを建設。その中央に交流の場としての「ワールド・コミュニティ・ゾーン」を設け、各国産品の並ぶバザールセンター、世界の味が楽しめるグルメセンター、各種イベントを行う多目的広場などを開設する」

中身の方はともかく、なんとなく夢とロマンが一杯にあふれた素晴らしい国際的な自由都市が完成するような感じがしてくる。

現代はフィーリングの時代である。

2年ほど前、NHK朝の番組「おはよう広場」で次のような話を紹介していた。東京神田のある店が〈クリーンアップレディ〉を募集したところ、若い女性が殺到したという。この仕事は何かというと、ビル清掃である。カタカナ職業はなんとなくカッコ良さをイメー

ジさせる。外来語の“魔術性”が女性本能をくすぐるのであろう。

いまから考えると滑稽な話だが、戦時中の昭和14、5年頃から終戦まで米英両国から入ってきた外来語を「敵性語」として、政府、軍部から排斥されたことがある。アメリカ映画の上映を禁止するだけでなく、学校での英語教育も禁止、音楽の〈ドレミファソラシド〉は〈ハニホヘトイロハ〉といい変えられた。

さらに敵性語の追放はあらゆる分野にわたって徹底的に行われた。雑誌の世界では「キング」が〈富士〉、「サンデー毎日」が〈週刊毎日〉、「オール読物」が〈文芸読物〉、「ユーモアグラフ」が〈明朗〉など。たばこも「チェリー」が〈桜〉、「ゴールデンバット」が〈金鷄〉、「カメラア」は〈椿〉、このほか〈光〉〈鵬翼〉など、この時代のたばこはすべて日本名となった。

このほか、パーマメントは〈電髪〉、マネキンは「招金」、タイヤは「外部輪帯」、レコードは〈音盤〉など、こじつけの迷訳、珍訳が強制された。スポーツ用語も例外ではなかった。ベースボールは〈野球〉、マラソンは〈耐久競争〉、バレーボールは〈排球〉、バスケットボールは〈籠球〉。野球用語もストライクが〈ヨシ1本〉、ボールは〈1つ、2つ…〉、セーフは「よし」、アウトは「駄目」、ほかにスクイズが「走軽打」、フェアヒットが「正打」など苦肉の造語が登場したが、これでは面白味も半減してしまう。

ラジオ、テレビ、ニュース、ワープロ、ホテルなどは漢字に翻訳してみても全然ピンとこない。テレビを中国風に〈電視台〉といっても、日本ではなじめない。ワープロにしてもズバリ商品イメージを伝える日本語は出てきそうもない。これらはもはや世界共通語である。

〈終わりに〉

以上みてきた通り、日本は島国でありながら、古い時代から諸外国の学術、宗教、文化を積極的に取り入れ、同時に外国の言語も大量に受け入れてきた。遠く祖先が中国から漢語を日本へ“輸入”したように、日本人は伝統的に外来文化を吸収し、それをうまく消化、さらに日本人独自の創造性も加えながら“おのがもの”を生み出す能力に秀れた人種といえよう。逆に島国であったが故に、つねに新しいものを素直に受け入れる素地があったのかも知れない。

また外来語が、日常語として日本人の生活の中に定着して使用されているのは、なんといいても、わかりやすく便利で能率的だからでもある。外国語だからという理由だけで反対することは、戦時中の敵性語追放と同じく現実離れした愚かなことである。

言葉は生き物である。また言葉はファッションでもある。遊び感覚の外国語が次々と入りこんでくるのも時代の流れである。由緒ある言葉でも、生活からかけ離れてしまうと、いつのまにか死語となって消えていく。ましてや洪水のように流入してくる外国語も、時代感覚にあわなくなればすぐさま葬られてしまう。

いまや、地球ファミリー時代、お互い独自の文化を交流しあい、国際理解を深めあう時代である。日本語のカブキ、ジュードー、サシミ、トーフ、スシ、カラオケなどが世界でも通用する時代である。それぞれの国独自の文化をもった外来語が世界共通の言葉として大いに広がっていく時代でもある。

マスコミとしては、たしかに“乱用”は慎しむべきであろう。わざわざ中途半端な外国語を使わなくても、日本語で十分通用するものはなるべく古来の日本語を使うべきである。節度ある記事の書き方こそマスコミに求められている課題であろう。

〈参考文献〉

- ▽「外来語の語源」(吉沢典男, 石綿敏雄) 角川書店
- ▽「現代外来語考」(石野博史) 大修館書店
- ▽「英語化する日本社会」(ハーバート・バリッシュ著、徳岡孝夫訳) サイマル出版会
- ▽「まちがしやすい英語」(小島義郎) 日本放送出版協会
- ▽「ことばの由来」(金田一春彦編) 講談社
- ▽「外来語からのことば」(中村孝也) 講談社
- ▽「ことば」シリーズ④外来語(文化庁)
 - ・外国語と外来語(松村明)
 - ・外来語を受け入れる心理(外山滋比古)
 - ・訳語の問題(古田東朔)
 - ・外来語とマス・コミュニケーション(菅野謙)
 - ・和製英語と国際用語(石野敏雄)
- ▽「カタカナ用語と略語3300辞典」日本実業出版社
- ▽「毎日新聞用語集」1989年版, 毎日新聞社
- ▽ 毎日, 朝日, 読売, 産経各新聞

Katakana Letters appeared many times in mass communication

Hiroyuki KOBAYASHI

Faculty of Liberal Arts and Science

Okayama University of Science

Ridaicho 1 - 1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1990)

Recently, several opinions such as “It is wrong to use too much Katakana Letters”, “Try not to use language from overseas countries as much as possible”, “Why Japanese people don’t use beautiful Japanese?” and so forth, are often pointed out on the readers’ corners on newspapers. It is not correct to recognize that Katakana equals languages from overseas countries. There are many cases to use Katakana for what are often written in Kanji Letters, such as Neko(cat), Sakura(Cherry blossom), and so forth.

However, more and more foreign language has been getting into Japanese these days in the background of internationalization. For this reason, there are some words whose meanings are nonsense, and we use them without any questions and inconveniences.

Although most companies related to mass communication have proposed their principles to reduce too much usage of foreign languages, it is the present situation that many foreign languages are getting to be on each newspaper in the social flow of Katakana-era. I would like to think about one of its observations.